

王鐸書論訳注（一）

高津 孝・大野 紘暉

本訳註は、『中國書法全集』（榮寶齋出版社、一九九三年）第八一・六二卷「王鐸」に付録として収録された劉正成「王鐸書論選注」に基づき、原文、訓読、訳文、注釈を施したものである。劉正成「王鐸書論選注」は、

王鐸の書作品、詩文集などから可能な限り書論に関する文章を抽出し整理注釈を施した労作で、全体は三章に分かれ、第一章に一九条、第二章に八条、第三章に八条の書論を配する。しかしながら、校訂になお不十分な点があり、原文については可能な限り原典に遡り、写真版などで確認を行った。また、本訳註が個人のパソコンで原稿を作成しweb公開するため、基本的には原文訳註を旧字体としたが限界があることはご了承願いたい。また、王鐸は特異な字体を使用することが多く、現在使用するフォントで

は対応できないため、『大漢和辞典』（大修館書店、二〇〇〇年）などの大型辞書の漢字番号を付すことで代用した部分もある。王鐸は理論家というよりはあくまで書家、芸術家であり、その芸術体験を言語化するという困難性が彼の書論の随所に現れ、その論理は錯綜し表現は難解である。本訳注が王鐸の理解に少しでも役立てば幸いである。

1. 臨古法帖後

崇禎十年閏四月摹于鄺山之陰。王鐸。書灋寶*古人結構。近觀數書者、動效時流。古難今易、古深奧奇變、今嫩弱俗樸、易數故也。嗚呼、詩與古文皆然、寧獨字灋也。丁丑四月。

古法帖を臨せる後

崇禎十年閏四月鄺山の陰に摹す。王鐸。

書灋は古人の結構を*るを譽ふ。近ごろ書を數ふ者を觀るに、動もすれば時流に效ふ。古は難く今は易きは、古は深奥奇變なるも、今は嫩弱俗樸にして、數び易きが故なり。嗚呼、詩と古文とは皆然り、寧ぞ獨り字灋のみならんや。丁丑四月。

崇禎十年閏四月に鄺山の北の地で臨書する。王鐸。

書法は古人の文字の組み立て方を体得することが大事である。近頃の書を学ぶ者を見ると、世俗の連中を模倣しがちである。古の書は学び難いが今の書は学びやすいのは、古の書は奥深く独特でありながら変化に富んでいるが、今の書は弱々しく通俗的で稚拙であり、これが、今の書が学び易い理由なのである。ああ、詩と古文も同様であり、書法だけではない。丁丑四月。

〔注〕

王鐸（一五九二-一六五二）、明末清初の書家。字は覺斯、また覺之、

四。号は、嵩樵、嵩漁、十樵、石樵、癡庵、煙潭漁叟などと称す。齋号は、

瓊蕊廬、擬山園、琅華館、張芝山房、紀事仙室、星語軒、曉雪齋、靈雪軒

などと称す。諡は文安。河南孟津の人。天啓二年（一六二二）の進士。倪

元璐、黃道周と同年の進士でもある。庶吉士・翰林院編修を授けられ、少

詹事に進み、経筵講官となり、後に東宮侍班に任ぜられる。崇禎十三年（一

六四〇）の九月に南京礼部尚書に任命されたが、十一月の父の訃報により

僅か二ヶ月足らずで官を辞した。明朝が滅び、崇禎十七年（一六四四）に

福王が南京で即位し、後に召されて東閣大学士となるが、順治二年（一六

四五）に錢謙益らとともに清朝に降伏した。王鐸は清朝に仕え、明史副総

裁などの官に至り、順治九年（一六五二）に礼部尚書を拝命するが、病の

ため出仕できないまま歿した。詩文書画を良くし、特に書は王羲之・王献

之の書法を師とし、『淳化閣帖』を中心に学んだ。集刻に『擬山園帖』『琅

華館帖』などがある。

本訳注を行うにあたり、便宜上、各文の前に劉正成「王鐸書論選注」の

題を、一部を除きそのまま踏襲している。王鐸の書論に関する先行研究と

しては、松永恵子「王鐸の書論と臨書にみる古典主義と浪漫主義の乖

離」（『九州中國學會報』四二、二〇〇四）などがある。

参考文献

薛龍春 二〇二〇『王鐸年譜長編』第一～四冊 中華書局

須羽源一 一九七六「解説」中田勇次郎責任編集『豪華普及版 書道藝術第

九卷』中央公論社 pp.177-187

臨古法帖後 「瓊蕊廬帖」記載の跋文で、『淳化閣帖』巻五に収録されて

いる「古法帖」を臨書した後に記している。「王鐸書畫選注」では、冒頭の一行が省略されているが補った。村上三島編『王鐸の書法【冊篇】』（二玄社、一九八二）などに抜粋して瓊蕊廬帖の図版が収録されている。村上によれば、瓊蕊廬帖は、王鐸四十四歳から、四十六歳までの三年間の臨書集で、弟の王鏞に与えたものであるが、年代順になっていないという。須羽によれば、この帖は絹本に古法帖を臨書したもので、ほとんどが淳化閣帖の臨書である。本来、馮禎卿に与えるつもりで書かれたものであるが、馮禎卿が没したか何かの事情で弟に渡したのではないかという。また、齋淵編『王鐸書畫編年圖目』（文物出版社、二〇〇四）の「王鐸印鑑・書齋印」を参照すると、「瓊蕊廬」と記された印が見られる。現在、瓊蕊廬帖はふくやま書道美術館に所蔵されている。

参考文献

村上三島 一九八一「作品解説 村上三島編『王鐸の書法【冊篇】』」二玄社 pp.1-8

須羽源一 一九七六「瓊蕊廬帖」前掲『書道藝術』 pp.188-190

崇禎十年 一六三七年。王鐸四十六歳。薛龍春によれば、この年の十月二十日に東宮侍班になった、と説明する。

参考文献

薛龍春 前掲『王鐸年譜長編』 第一冊

鄺山（じょうざん） 須羽は、「鄺山は邳鄺山のことであるので、洛陽であるわけである」と述べる。邳鄺（こうじょう）は周の旧都（現在の河南省洛陽西）である。

参考文献

須羽源一「瓊蕊廬帖」前掲『書道藝術』

灋 法の異体字。

賁 貴の異体字。

* *は『大漢和辞典』巻四・イ部・一〇二〇六に、『正字通』「得、本作*」。偏が「イ」、旁が上「見」下「寸」。

結構 組み立て。つまり、文字の組み立てを指す。衛夫人『筆陣圖』「結構圓備如篆法、飄颻灑落如草草。」

敦 学の異体字。

時流 世俗の輩。『晉書』阮裕伝「諸人相与追之、裕亦審時流必当逐」而疾去。」

深奥 奥深く理解しがたいこと。

嫩弱 弱々しい様。

穉 稚の異体字。

2. 臨懷素律公帖後

懷素獨此帖可觀、他書野道、不願臨、不欲觀矣。

懷素の律公帖を臨すの後

懷素は獨だ此の帖のみ觀るべし、他書は野道なり、臨するを願はず、觀るも欲せず。

懷素の書については、この帖だけが鑑賞する価値がある。懷素の他の書は野道（正しくない道）なので、臨書したくもないし、鑑賞しようと思わないのである。

〔注〕

臨懷素律公帖後 「瓊蕊廬帖」 記載の跋文。この跋文は、懷素の書たとされる「蔵真帖」「律公帖」を臨書した後に記したもの。「蔵真帖」「律公帖」の図版は、中田勇次郎責任編集『豪華普及版 書道藝術 第五卷』（中央公論新社、一九七六）などに収録される。懷素のこの二帖について、中田によれば、蔵真帖は草書六行、律公は二帖より成り、律公好事者にはじまる草書三行および貧道にはじまる草書九行よりなる。この九行は第一行の「脚氣」二字をとって、脚氣帖ともよばれ、宋の元祐八年（一〇九三）游師雄（字は景叔）が真蹟に基づき模刻したもので、末尾の自跋に詳しく、諸跋等とともに西安碑林に刻石が伝わり、法帖では玉煙堂法帖に刻入されているという。

参考文献

中田勇次郎 一九七六「蔵真・律公帖」 中田勇次郎責任編集『豪華普及版 書道藝術 第五卷』中央公論新社 pp.206-207
 懷素 唐の畫家。懷素（七二五また七三七〜？）字は蔵真、俗姓は錢氏。詩人錢起の従甥。長沙の人とも永州零陵の人ともされている。張旭とともに「狂草」の書で名高い。張旭、懷素の伝記について、石田によれば、詳しい伝記は不明で、生歿年も明確ではないという。懷素の伝記としては、茶聖陸羽の「僧懷素伝」が詳しいとされ、矢淵孝良訳註「懷素」（福本雅一監修『中国文人伝 第二巻 唐』二）所収、藝文書院、二〇〇五）がある。
 参考文献

石田肇 二〇一〇「懷素」井垣清明ほか編『書の総合事典』柏書房 pp.186-

190

野道 正しくない道、立派でない道。『隋書』高祖紀下「五月辛亥 詔魚猫鬼、蠱毒、厭魅、野道之家、投於四裔。」

3. 為竇道兄書跋

每書富於譚兵說劍、時或不平感慨、十指下發出意氣、輒有椎髯鄙之狀、請止竇道兄、然耶不耶。

竇道兄の為に詩を書すの跋

書する毎に譚兵說劍に於いて、時に或いは不平感慨あるに当たりては、十指下れば意氣を發出し、輒ち髯鄙を椎するの狀有り、正さんことを竇道兄に請ふ、然るや不（いな）や。

書を書く度に、軍隊や劍について話し、あるいは心に不平を抱え、悲しみ憤る時は、筆を下せばそこに氣持が溢れ出て、ただちに髯鄙を鉄槌で打ち殺した時のような緊迫した狀況が現れる。竇庵閣下どうか正せ。是か非か。

〔注〕

為竇道兄書跋 この作品の図版は、『中國書法全集 第六一巻 王鐸』（榮寶齋出版社、一九九三年）に収録されている。薛龍春によれば、竇道兄とは楊□□（竇庵）のことであり、また崇禎十四年時には竇庵の為に多くの

書を書いた、と説明する。この跋の前には、「人不知」「艱虞火」という王鐸自作の詩が二つ書かれており、『擬山園選集』詩集・五言律詩・卷五・十九葉、卷十九・五言律・十一葉（國家圖書館古籍與特藏文獻資源）にそれぞれ見られ、「艱虞火」は「艱虞」という題に改められている。

参考文献

薛龍春 前掲『王鐸年譜長編』第二冊

王鐸撰『擬山園選集』國家圖書館古籍與特藏文獻資源

譚氏説劍 軍隊や剣について説き語ること。

不平 憤慨、不満のこと。『楚辭』九辯「坎廝兮貧士失職而誌不平。」

感慨 悲しみ憤る様のこと。『史記』季布欒布列傳論「天婢妾賤人感慨而自殺者、非能勇也、其計畫無復之耳。」

十指 十本の指。両手。『荀子』強國「拔戟加乎首、則十指不辭斷。」

意氣 精神のこと。『晏子春秋』問上十「寡人意氣衰、身病甚。」

晉鄙 戦国時代、魏の安釐王に仕えた将軍。『史記』魏公子列伝に晉鄙の記述が見られる。趙が秦に包囲され、趙の宰相平原君が魏にいる妻の弟信陵君に助けを請い、晋鄙を中心とする魏軍が援軍として派遣される。しかし、秦の報復を恐れた安釐王は、晋鄙を鄴に留めさせる。後に如姫の力を借りて割符を盗んだ信陵君は晋鄙の元へ赴き、指揮権を自分に渡すように交渉する。信陵君を怪しんだ晋鄙は反論するが、信陵君の従者である朱亥に鉄椎で撲殺された。

参考文献

野口定男 一九六九『中国古典文学大系 史記（中） 第十一卷』平凡社

讀正 叱正をお願いすること。敬辞に多く用いられる。明 王守仁『傳習錄』卷三「是夕、侍坐天泉橋、各舉讀正。」

4. 答秋濤

轟飲驪甚、便欲擊缶以代秦聲、拙字蜥蜴形耳、足下何愛之若此、自顧之、無異枯核之登華俎。

秋濤に答ふ

轟飲し驪ひ甚だしければ、便ち缶を撃ちて以て秦聲に代へんと欲す。拙字は蜥蜴の形のみ、足下何ぞ之を愛つること此くの若き。自ら之を顧みるに、枯核の華俎に登るに異なること無し。

わたくしの書作品は、渾池の会で酒宴が盛り上がった際に、秦の昭王が趙の藺相如に迫られていやいや缶を打ち鳴らして秦の音楽の代用としたようなものです（古人の作品に比べると代用のようなものです）。私の字はミミズのような見苦しい字形であります。どうしてこんなにも私の字を愛でてくれるのですか。思うに私の書は、枯れた核（さね）が美しい供物台に載っているのと同じです。

〔注〕

答秋濤 『擬山園選集』文集・卷五十（北京圖書館古籍珍本叢刊）に収録。

ここでは、『擬山園選集』に記載される「答秋濤」の題に従った。「王鐸書論選注」では、冒頭の一部が省略されているが補った。また、周亮工『尺牘新鈔』巻五に収録。周亮工（一六二一―一六七二）、字は元亮、河南省祥符の人。崇禎十三年の進士。王鐸と同じく明清の両朝に仕えた。博字で

書画篆刻にも精通し、著書に『印人伝』等がある。薛龍春によれば、秋濤は陳子莊を指し、『同治番禺縣志』卷四十二・列伝十一に伝がある。

参考文献

王鐸撰『擬山園選集』文集（北京図書館古籍珍本叢刊二二）所収、書目文獻出版社

坂出祥伸 一九八六「周亮工」中田勇次郎編『中国書論大系 第十四卷・清四』二玄社 p293

薛龍春 前掲『王鐸年譜長編』 第一冊

毒飲 度を越して酒を飲むこと。

擊缶 缶は瓦器の樂器であり、秦の人々はこれを撃つて歌を節した。『詩経』陳風宛丘「坎其擊缶、宛丘之道。」

秦聲 秦の音楽のこと。ここは、趙が秦に軍事的圧迫を受ける中、渾池で秦王と趙王が会談した「渾池の会」での出来事を踏まえる。『史記』廉頗

藺相如列伝「趙王竊聞秦王善為秦聲、請奏盆瓠秦王、以相娛樂。」

蚯蚓 みみずのこと。『礼記』月令「孟夏之月」螻蟈鳴、蚯蚓出。」

俎 儀式で犠牲を置く台。または、肉などを調理するまな板のこと。『詩経』小雅楚茨「為俎孔碩」

5. 琅華館倣古帖跋

辛卯二月十八日、玉調親家攜卷求書。予書何足重、但從事此道數十年、皆本古人、不敢妄為。故書古帖。瞻□東前、瞠乎目傷。譬如登霍華、自覺力有不逮、假年苦學、或有進步耳。佗日當為親家再書、以驗所造如何。弟王鐸六句書。

琅華館倣古帖の跋

辛卯二月十八日、玉調親家卷を攜へ書を求む。予が書は何ぞ重しとするに足らんや、但だ此の道に従事すること數十年、皆な古人に本づき、敢へて妄りに為さず。故に古帖を書するに、瞻□東前、瞠乎として自ら惕（おそ）る。譬ふるに霍華に登るが如く、自ら覺ゆ力逮ばざる有れども、年を假りて苦學し、或いは進歩有りと。佗日當に親家の為に再書し、以て造れる所如何なるかを驗すべし。弟王鐸六句に書す。

辛卯（順治八年、一六五一年）二月十八日、張鼎延が卷を携えて私に書を求めた。私の書は重視するに足りない。ただ書の道に従事して數十年、全て古人の書に基づき、決して勝手気ままに書作してはいない。そのため、古帖を臨書するときには、瞻□東前、目を見張り自ら恐れ慄く。例えるに霍山、華山に登るようなものであり、力が及ばない所もあるが、長生きて苦学したので、もしかすると進歩があったのかも自ら思っている。他日きつとあなたの為に再び書くので、わが到達点がどれほどであるかを検証せよ。王鐸齡六十、書く。

〔注〕

琅華館倣古帖跋 『琅華館帖』に刻入されている「琅華館草書、王鐸倣古」の跋文。底本とした図版は、村上三島編『王鐸の書法【琅華館帖】』（二玄社、一九九九（新装版））に所収されているものである。「王鐸書雲臺選注」では、冒頭一行が省略されているが補った。福本雅一「王鐸雜記」（『王鐸の書法【冊篇】』所収）の中に、福本氏が訳した任博文「王鐸琅華館帖簡

介」(『中原文物』一九八一・第一期)という一文が収められている。それによれば、『琅華館帖』は一九五八年に明末清初の官僚であった張鼎延の別荘の趾から偶然に発見された刻石である。刻石十二片全二十一面に六一三〇余字が刻まれており、王鐸が張鼎延に宛てた手紙を多く含むものであった。おそらく刻された尺牘は洛寧の張鼎延家蔵のものであったとされる。『琅華館帖』に収録される書に関して、村上は、「ただ全篇が王鐸の書で占められているわけではなく、張家の人々の筆跡もかなり混じっているためいささか量的にさびしい気もしないではない」(村上三島「王鐸の故郷―河南省を訪ねて」(『王鐸の書法【琅華館帖】』所収)と説明する。

玉調親家攜卷求書 玉調とは、張鼎延のこと。張鼎延、字は慎行、号は玉調、河南省永寧の人。天啓二年の進士。王鐸と張鼎延は同榜の進士である。

『永寧縣志』巻五・人物志に張鼎延の伝がある。村上は、王鐸の娘の一人が張鼎延の息子である天政に嫁いでおり、王鐸は張家の所へ度々往来していたようであると説明する。「玉調親家」とは、前述の通り、王鐸の娘が張家に嫁いだことで張鼎延と親族関係になったからである。底本では、「家」攜の部分が欠損している。しかし、『王鐸の書法【琅華館帖】』で釈文を施した田中東竹氏、及び薛龍春(『王鐸年譜長編 第三冊』)の両者が、「玉調親家攜卷求書」と読んでおり、ここではそれに従って読んだ。

参考文献

村上三島「王鐸の故郷―河南省を訪ねて」前掲

但從事此道數十年 底本では、「道」「數」「十」の部分が欠損している。田中、及び劉正成は、「但從事此道數十年」とし、薛龍春(『王鐸年譜長編 第三冊』)は「但從事此道四十年」と読んでいる。ここでは底本に従って読んだ。

瞻 東前 底本では、『瞻』の部分が欠損している。田中は『瞻』東前とし、劉正成は「瞻彼在前」、薛龍春(『王鐸年譜長編 第三冊』)は「瞻之在前」と読んでいる。伊藤松濤編『王鐸字典』(二玄社、一九八三)を参照すると、『瞻』東前の「東」の字は「東」の項目に収められている。

瞠乎 瞠然。驚き見てしまうこと。

霍華 華は華の異体字。霍山と華山。霍山は安徽の天柱山の別称。

六旬 旬は十年を表す。故に、六旬は王鐸六十歳のこと。

6. 琅華館求書帖

弟於筆墨、敝帚也。無益國家、暇中偶一戲為之。全力惟求經史、批觀詩文。操觚求知己、不易易耳。至今畫、書、作文、積之如山陵、反生諸苦。矧勞心疲力、耗日持去、皆為幻夢。親家觀之、可嘆。此公促之急、如此舉動、猶然索我邯鄲夢中矣。盧生有賢、何以賓對。弟王鐸拜奉。玉調翁張親家閣下。

琅華館求書帖

弟は筆墨に於いて、敝帚なり。國家に益する無く、暇中に偶たま一たび戯れて之を為す。全力で惟だ經史に求め、詩文を批觀するも、操觚に知己を求むるは、易易たらざるのみ。今に至りて畫、書、作文、之を積むこと山陵の如きも、反て諸苦を生む。矧んや心を勞れさせ力を疲れさせ、日を耗やし持ち去れるは、皆な幻夢なり。親家は之を觀て喩(わら)ふべし。此れ公の促すことの急なればなり。此くの如き舉動は、猶然我を邯鄲夢中に索むるなり。盧生賢有れば、何を以て賓對せん。弟王鐸拜し奉る。玉調

翁張親家閣下。

私は書家としては、破れた箒のように無駄な存在です。国家に利益なく、暇な時に偶然戯れにこれを書きました。全力でただ経書と史書に真理を求め、詩文を批評し鑑賞しましたが、文筆に従事して自分のことを理解してくれる人を探すのは簡単なことではありません。今に至るまで、画、書、作文を山のように多く作成し積み重ねてきましたが、かえって様々な苦悩を生み出すことになり、まして心を疲れさせ体力を奪い、日々を無駄に過ごすことになったことは、すべて幻です。あなたはこの書をご覧になって笑うことでしょう。これはあなたの催促が急であるためです。私の下を訪ね書を求めて来られたことは、私を邯鄲夢中に求めるようなものです。物語中の人物である盧生が口をきいたら、何とお答えするでしょうか。王鐸は謹んでこの書簡を差し上げます。張鼎延閣下。

〔注〕

琅華館求書帖論書 劉正成は「琅華館求書帖論書」と題しているが、底本を見ると本文の前に「求書帖」との記載があるので、「琅華館求書帖」という名に変えた。劉正成は、この「求書帖」と先の「琅華館倣古帖跋」は、およそ同じ時期に張鼎延に書き与えたものと説明している。

筆墨 書作品のこと。漢 王充『論衡』乱龍「子駿漢朝智囊、筆墨淵海。」
敝帚 破れた箒のこと。無駄な物の喩え。唐 黃滔「代鄭郎中上靜恭盧相」…「隻眇高車而激切、空持敝帚以屏營。」

操觚 詩文を作り、文筆に従事すること。『文選』陸機・文賦「或操觚以率爾、或含毫而遽然。」

知己 自分のことをよく理解してくれる人。『戰國策』楚策四「驥於是俛而噴、仰而鳴、聲達於天、若出金石聲者、何也。彼見伯樂之知己也。」

易易 容易なこと。『礼記』鄉飲酒義「吾觀於鄉、而知王道之易易也。」

耗 ついやす。消費すること。

幻夢 非現実的な夢の世界。唐 王維「胡居士臥病遺米因贈」詩に「有無斷常見、生滅幻夢受。」とある。

觀 みる。見ること。

噱 わらう。大笑いすること。

舉動 行動。前述の劉正成の見解を踏まえると、「琅華館倣古帖跋」中の、「辛卯二月十八日、玉調親家は卷を攜へ書を求める。」ということが、舉動の内容であろう。『後漢書』牟融傳「代伏恭為司空、舉動方重、甚得大臣節。」

邯鄲夢 沈既濟『枕中記』の故事で、実際に存在しないことの喩え。貧乏な青年盧生が道士呂翁と宿屋で出会い、呂翁が所持していた枕を借りて寝ると、盧生は富・名譽を極めた生涯を夢で見る。夢から覚め見渡すと、呂翁が横に座り、宿屋の主人がまだ黍を煮ていた最中で寝る以前のままであったという話。『太平広記』卷八十二、『文苑英華』卷八十三に収録。前野直彬氏の現代語訳が『中国古典文学大系 六朝・唐・宋小説選 第二十四卷』（平凡社、一九六八）に収録される。

盧生 前述『枕中記』の主人公である盧生のこと。

脣 唇の異体字。

寘對 寘は「置」。故に置對であり、質問に対して受け答えること。『漢書』劉向傳「望之亦坐使子上書目寘前事、恭顯曰令詭獄置對。」

7. 草書杜詩卷跋

丙戌三月十五日、戲書於北畿、為天政賢坦。吾書學之四十年、頗有所從來、必有深相。愛吾書者、不知者則謂為高閑、張旭、懷素野道、吾不服、不服、不服。

草書杜詩卷の跋

丙戌三月十五日、戲れに北畿に書し、天政賢坦の為にす。吾が書は之を學ぶこと四十年、頗ぶる從りて來たる所有りて、必ず深相あり。吾が書を愛する者、知らざる者は則ち謂為（おも）へらく高閑、張旭、懷素は野道たりと。吾は服さず、服さず、服さず。

丙戌（順治三年）三月十五日、北京で戲れに張璿のために書いた。私の書は、書法を學んで四十年、とりわけ古典に根柢を持つ作品であり、必ず古典との深い相似点がある。私の書を愛するもの、知らないものは、高閑、張旭、懷素の書は野道（正しくない道）であるという。納得しない、納得しない、納得しない。

〔注〕

草書杜詩卷 この卷には杜甫詩が七首（「題玄武禪師屋壁」「秦州雜詩二十首其十九」「送遠」「玉台觀」「觀李固請司馬第山水圖」「旅夜書懷」「登岳陽樓」）、王灣「次北固山下」、祖詠「江南旅情」、綦毋潛「宿龍興寺」の計十首が揮毫されている。図版は、『中國古代書畫圖目 四』（文物出版社、一九九〇）に収録されている。薛龍春によれば、この作品は婿である張璿

のために書いたものであり、また、張璿は張鼎延の次男であり、天啓五年の進士であるという。

参考文献

薛龍春 前掲『王鐸年譜長編』第三冊

丙戌 順治三年（一六四六）、王鐸五十五歳。薛龍春によれば、王鐸はこの年に弘文院學士、明史副總裁に任命されたと説明する。

参考文献

薛龍春 前掲『王鐸年譜長編』第三冊

北畿 畿は都、つまり北京のこと。

天政 前述の張璿のこと。

賢坦 賢い婿のこと。『世說新語』雅量「郗太傅在京口、遣門生与王丞相書

求女婿。丞相語郗信「君往東廂、任意選之。」門生歸曰「王家諸郎亦皆可嘉、聞來覓婿、鹹自矜持、唯有一郎在東床上坦腹臥、如不聞」郗公雲「正此好。」訪之、乃是逸少、因嫁女与焉」。

高閑 唐の書家。生卒年不詳。烏程の人。幼少時から才氣があり、宣宗の時（八四七～八五九）に召され、草書を御前で披露して紫の袈裟を賜る。著名な書に、「草書十字文」がある。

参考文献

田村孝弘 二〇〇五「高閑」福本雅一監修『中國文人伝 第二卷 唐二』芸文書院 pp.178-183

張旭 唐の書家。生卒年不詳。字は伯高、蘇州呉県の人。官は左衛率府長史となる。酒を好み、杜甫の「飲中八仙歌」の一人に挙げられる。懷素とともに自由奔放で極端に字形を崩した狂草の書家で名高い。

参考文献

田村孝弘 二〇〇四「張旭」福本雅一監修『中国文人伝 第一巻 唐一』芸文書院 pp.182-190

8. 琅華館帖跋

書不師古、便落野俗一路、如作詩文、有法而後合。所謂不以六律、不能正五音也。如琴棋之有譜然。觀詩之風、雅、頌、文之夏、商、周、秦、漢、亦可知矣。故善師古者不離古、不泥古。必置古不言者、不過文其不學耳。辛巳正月書此冊、客輒至、經三日始成。質之循如楊詞丈以為何如。孟津王鐸書於懷州之東湖草堂。

琅華館帖冊の跋

書は古を師とせざれば、便ち野俗の一路に落つ。詩文を作るが如く、法有りて而る後に合す。所謂六律を以てせずんば、五音を正すこと能わざるなり。琴棋の譜の有るが如く然り。詩の風、雅、頌、文の夏、商、周、秦、漢を觀れば、亦た知るべし。故に善く古を師とする者は古を離れざるも、古に泥まず。必ず古を置いて言はざる者は、文を其れ學ばざるに過ぎざるのみ。辛巳正月此の冊を書するに、客輒に至りて、三日を経て始めて成る。之を循如楊詞丈に質（ただ）さば以て何如と為さん。孟津王鐸懷州の東湖草堂に書す。

書は古を模範としなければ、粗野で俗な道に落ちてしまう。それは詩文を作るようなもので、法が存在して、その後で一致するのである。所謂六律を用いなければ、五音を正すことはできないである。琴と棋にそれぞれ

譜が存在するようなものである。『詩經』の風、雅、頌や、夏、商、周、秦、漢の文を見れば、同様に知ることができる。そのため、うまく古典を模範とする者は古典から離れないが、古典には拘泥しない。必ず古典を捨てて何も言わない者は、文を学んでいないだけだ。辛巳（崇禎十四年）正月にこの冊を書いていたところ、來客が來たので、間が空いて三日間を経てやっと完成した。これを楊挺生に問い質したらどのように判断するであろうか。孟津王鐸が懷州の東湖草堂で書す。

〔注〕

琅華館帖冊跋 王鐸五十歲作。図版は、『中國書法全集 第六二卷 王鐸』（榮寶齋出版社、一九九三年）などに収録されている。薛龍春によれば、この作品は楊嗣修の子である挺生（循如）の為に書かれたものである、と説明している。楊嗣修、字は景歐、河内の人、万曆三十五年の進士、『河内縣志』卷二十七に伝がある。楊挺生、字は循如、河内の人、『河内縣志』卷二十六の先賢傳下に伝がある。

参考文献

薛龍春 前掲『王鐸年譜長編』第二冊

野俗 粗野で俗なこと。

六律 十二律に属する陽の音で、黃鍾、大族、姑洗、蕤賓、夷則、無射を指す。

五音 古代中国の音階であり、宮、商、角、徵、羽の五音のこと。『孟子』離婁上「不以六律、不能正五音。」

詩之風 雅、頌

『詩經』は風、雅、頌の三体で構成される。風は国風とも称し、周南、召

南 邶風・鄘風・衛風、王風、鄭風、齊風、魏風、唐風、秦風、陳風、檜風、曹風、邠風に区分される。雅は大雅・小雅に分かれる。頌は王の先祖の功績を称賛し、宗廟で歌う歌謡のこと。風、雅、頌は「六義」に含まれ、後世の中国・日本に大きな影響を与えた。

文之夏、商、周、秦、漢

韓愈をはじめとする唐宋八大家は、魏晉から始まった四六駢儷体に反し、文を書く際に『史記』などの漢以前（夏、商、周、秦、漢）の古文を模範とした。

循如楊 前出の楊挺生のこと。

詞丈 先輩詩人に対する敬称

9. 草書杜甫詩跋

丙戌三月初五、夜二更、帶酒、微醺不能醉、書於北都琅華館。用張芝、柳、虞草法、拓而為大、非懷素惡札一路、觀者諦辨之、勿忽。孟津王鐸。

草書杜甫詩の跋

丙戌三月初五、夜二更、酒を帶び、微醺なるも酔ふこと能はず、北都琅華館に書す。張芝、柳、虞の草法を用い、拓いて大と為し、懷素の惡札一路に非ず。觀る者は之を諦辨し、忽せにすること勿れ。孟津王鐸。

丙戌（順治三年）三月五日、夜の二更の時、酒を飲んだが、ほろ酔いであるが酔えない。北都の琅華館にて書く。張芝、柳公權、虞世南の草法を用いて草書の境地を切り開き押し広げた。懷素の拙劣な書の同類ではない。

鑑賞する者は仔細に識別すべきであり、疎かにしてはならない。孟津王鐸。

〔注〕

草書杜甫詩跋 杜甫「秦州雜詩二十首」の第十九首を書いた後の跋文。王

鐸五十五歳作。村上三島編『王鐸の書法【卷子篇】』（二玄社、一九八

〇）に図版が収録されている。

二更 五更の一つ。午後九時から十一時頃を指す。王維「秋夜獨坐」…「獨坐悲雙鬢、空堂欲二更。」

微醺 少し酒に酔うこと。ほろ酔い。『宋史』邵雍傳「旦則焚香燕坐、晡時酌酒三四甌、微醺即止、常不及醉也。」

用張芝、柳、虞草法 張芝は後漢の人。字は伯英、敦煌酒泉の人。生没年不詳。草書を完成させ、草聖と称される。柳は柳公權（七七八～八六五）のこと。字は誠懸、華原の人。元和初年の進士。書は王羲之を学び、後に顔真卿の書を習う。著名な書に、「玄秘塔碑」がある。虞は虞世南（五五八～六三八）のこと。字は伯施、越州余姚の人。書は智永を模範とし、王羲之を学ぶ。歐陽詢、褚遂良、薛稷とともに初唐の四大家。著名な書に、「孔子廟堂碑」がある。「用張芝、柳、虞草法」の草法というのは、『淳化閣帖』中に収録されている三者の草書作品の筆法のことを指すと思われる。

参考文献

二玄社編集部 二〇一〇『書道辞典 増補版』二玄社

鶴田一雄 二〇〇七「玄秘塔碑」書学書道史学入編『日本・中国・朝鮮書

道史年表事典』（改訂版）菅原書房 p.190

下野健児 二〇〇七「虞世南・孔子廟堂碑」同上 p.172

惡札 拙劣な書のこと。米芾『海嶽名言』『柳公權師歐、不及遠甚、而為醜怪惡札之祖。』

諦辨 詳細に見分けること。

10. 臨淳化閣帖簽注一

擬古體。擬者正為世多不肯學古、轉相詬語耳。不以規矩、安能方圓。

臨淳化閣帖簽注一

古體を擬ふ。擬ふ者は正に世に多く肯へて古を學ばず、轉（かへ）って相ひ詬り語るのみと為す。規矩を以てせずんば、安くんぞ能く方圓ならんや。

古典の書体を模倣する。模倣については、世間には進んで古典を学ぼうとせず、かえって古典を罵り語るだけという人が多いとほんとうに思う。

定規とコンパスを用いなければ、方形や円形を描くことはできないのである。（古典を学ばなければ、書の本質に到達することはできない。）

〔注〕

臨淳化閣帖簽注一 本文は、順治六年（一六四九）、王鐸五十八歳の時に『淳化閣帖』を臨書した作品とともに記されている。後巻には、清・張廷済の跋文がある。作品全体の図版は、村上三島編『王鐸の書法【卷子篇二】』（二玄社、一九八〇）、鈴木敬編『中國繪畫總合圖録第三卷 日本編I 博物館』（東京大学出版会、一九八三）、大阪市立美術館ほか編『大阪市立美術館蔵・上海博物館蔵 中国畫名品図録』（《中国畫名品展》実行委員会、一九九四）などに収録される。また、福本雅一ほか著『書十人系碑法帖篇 第四十卷 王鐸』（同朋社、一九九五）には、一部分の図版が収録されている。作品全体について、村上によれば、巻中に山水画が描かれている珍しい淳化閣帖の臨書卷であるという。薛龍春によれば、この巻は、

張端が父張忻のために王鐸に依頼して制作されたものである。現在は大阪市立美術館に所蔵されている。

参考文献

村上三島 一九八〇「作品解説」 村上三島編『王鐸の書法【卷子篇二】』

二玄社 pp.1-12

薛龍春 前掲『王鐸年譜長編』 第三冊

淳化閣帖 北宋の太宗が王著に命じて作らせた法帖。淳化三年（九九二）

完成、全十卷。宇野によれば、巻の構成は、歴代帝王法帖第一、歴代名臣

法帖第二、歴代名臣法帖第三、歴代名臣法帖第四、諸家古法帖第五、法帖

第六王羲之書一、法帖第七王羲之書二、法帖第八王羲之書三、法帖第九王

献之書一、法帖第十王献之書二である。淳化閣帖の特徴として、石田は「今

日、名実ともに確認しうる法帖の始まりで、集帖の祖といわれ、略して『閣

帖』という」と述べ、また「王羲之・王献之を中心としており、唐代の書

は少なく、顔真卿はとられていない。宋代の前代に対する評価と太宗の好

みを反映している。二王中心ではあるが、豊富な内容であり、中国書道史

上、画期的な事業であった」と説明する。淳化閣帖に関する文献として、

福本雅一責任編集『淳化閣帖』十卷（二玄社、一九八〇）などがある。

参考文献

宇野雪村 一九八四『法帖事典』 雄山閣

石田肇 二〇〇七「淳化閣帖」前掲『日本・中国・朝鮮書道史年表事典』

p.195

學古 古代の典籍を学習したり研究したりすること。『書経』周官「學古入

官。」

不以規矩 安能方圓 『孟子』離婁上「孟子曰、離婁之明、公輸子之巧、不

以規矩、不能成方圓。」とある。

1. 臨淳化閣帖發注二

擬漢張芝體。二王諸家所宗。不師古言古。孔子奚為好古信古乎。可歎。

臨淳化閣帖簽注二

漢の張芝の體を擬ふ。二王諸家の宗とする所なり。古を師とせず古を言るも、孔子奚為（なんす）れぞ古を好み古を信するや。歎くべし。

漢の張芝の書体を模倣する。（張芝は）二王をはじめとして諸家が尊重する存在である。今の人は古典を手本とせず、古典を非難するが、それでは孔子はどうして古典を好み、古典を信じたのであろうか。嘆くべきことである。

【注】

臨淳化閣帖簽注二 本文は「臨淳化閣帖簽注一」と同じ作品に記される。

二王 王羲之・王献之の並称。王羲之（三〇三～三六一、三〇七～三六五

など諸説あり）、字は逸少、琅邪臨沂の人。右軍將軍の官名から王右軍とも称される。後世、書聖と仰がれる。王羲之の伝記について、西林は「逸話が多いが、伝記にははっきりしない面がある」と述べる。また、王羲之の真蹟は現存せず、伝世品は全て臨本、刻本、搨模本などである。『晋書』に王羲之の記載があり、興膳宏訳『晋書』王羲之伝（『世界文学大系七十 二 中国散文選』筑摩書房一九六五）などの訳がある。王献之（三四四～三八八など諸説あり）、字は子敬、琅邪臨沂の人。王羲之の七男。献之の書に関して、外山は「王羲之の諸子の中で、最年少の献之がもつとも書天分に恵まれており、父より書法を授けられ、父の書よりもさらに逸氣に富んだ書風をつくり上げた」と説明する。

参考文献

西林昭一 二〇〇七「二王」前掲『日本・中国・朝鮮書道史年表事典』

pp.122-123

外山軍治 一九六五「王献之」下中邦彦編『書道全集 第四卷』平凡社

師古 古を手本とすること。『書経』説命下「事不師古、以克永世、匪説攸聞。」

孔子奚為好古信古乎 『論語』述而に「子曰、述而不作、信而好古、竊比於

我老彭。」とある。

12. 臨淳化閣帖跋

予書獨宗羲獻。即唐宋諸家皆發源羲獻、人自不察耳。動曰、某數米、某數蔡。又邇而上之曰、某虞、某柳、某歐。予此道將五十年、輒彊項不肯屈伏、古人字畫詩文、咸有萬襲、匪深造博文、難言之矣。己丑三弟鐘在京、弟雅嗜古、研慮字畫詩文、即宋詞元曲皆有權衡、可與寤言。因書古體、正不屈心從今、如詩之鍾譚、入于酸薄淺隘、譬之禪門十二部、有大乘、有小乘、有正宗、有魔道、未易戶曉、下士大咲、正不必戶曉耳。書哥大司寇北海張老社盟、應不憎此語也。嗣君中柱同館、又雅相善、持此求予書、偶倣宋數家意畫一段、五十年迂叟嗜此、逼六句。北海君必曰、斯卷所撰、夫夫也。匪無所源本、而為墨豬者。噫、予又轉彊項而中心屈伏矣。洛漁王鐸識于琅華館。

淳化閣帖を臨すの跋

予が書は獨だ羲獻を宗とす。即ち唐宋諸家は皆な源を羲獻に發するも、人自ら察せざるのみ。動もすれば曰く、某は米を數び、某は蔡を數ぶと。又溯りて之を上りて曰く、某は虞なり、某は柳なり、某は歐なりと。予の此の道は將に五十年ならんとし、輒りに彊項して肯へて屈伏せず。古人の字畫詩文、咸な萬襲有りて、深造博文にあらざれば、之を言ひ難し矣。己丑三弟の鐘は京に在り。弟は雅（つね）に古を嗜み、字畫詩文を研慮す。宋詞元曲に即（つ）きて皆な權衡有りて、與に寤言すべし。因りて古體を書して、正に心を屈して今に従はず、詩の鍾譚の酸薄淺隘に入るが如し。之を禪門十二部に譬ふれば、大乘有り、小乘有り、正宗有り、魔道有りて、未だ戸曉するに易からず。下士大いに咲（わら）ふは、正に必ずしも戸曉せざるのみ。書して大司寇北海張老社盟に寄するも、應に此の語を憎まざるなり。嗣君中柱は館を同じうし、又た雅に相い善く、此を持して予に書を求るに、偶々宋數家の意に倣ひて一段を畫く。五十年迂叟此を嗜み、六句に逼らんとし、北海君必ず曰く、斯卷の撰する所は、夫（か）の夫なり。源本とする所無くして墨豬を為す者に匪ずと。噫予は又た彊項を轉じて中心屈伏す。洛漁王鐸琅華館に識す。

私の書はただ王羲之・王獻之を宗とする。唐宋の諸家は皆な王羲之・王獻之を起源とするが、世間の人々はこの事実に気づいていないだけだ。とかく、私は米芾を学び、私は蔡襄を学んでいると言いがちである。また邇

り、私は虞世南を、私は柳公権を、私は欧陽詢を学んでいると言う。私の書法の道は、五十年に及ぼうとしているが、私は常に剛直で時流に屈しなかった。古人の書画や詩文には全て規則が存在しているので、深く真理を理解し古の文芸に精通していなければ、これを言うのは難しい。己丑（順治六年（一六四九））。三弟の王鑑は北京にいた。三弟はいつも古を嗜み、書画や詩文を研究し考察していた。宋詞元曲に対しても見識を有している

ので、一緒に向かい合って語らうことができる。したがって、古体の書を書いて、良心に背いて今の流行に従うようなことはしない。（今の流行に従うことは）鍾惺・譚元春の詩のような貧乏臭く薄っぺらで、内容が表面

的で狭い道に入るようなものである。これを禪門十二部に喩えると、大乘が存在し、小乗が存在し、正宗が存在し、魔道が存在して、これを誰もが分かるようにするのは容易ではない。程度の低い者が大笑いするのは、必ずしも皆が分かっているわけではないだけなのだ。このことを手紙に書いて張忻どのに送っても、恐らくこの言葉を憎まないであろう。彼の息子の

張端とは同じく翰林院に所属したことがあり、また常に親しい仲であることから、巻物を持参して私に書を求めてきたので、偶然、宋代数家の意を模倣し、一幅の絵を描いた。五十年間、私は書画を嗜み、もう六十歳に迫ろうとしている。張忻どのは間違いなく次のように言うであろう。この巻を書いたのは王鑑でしかあり得ない。基づく所なく線質に弛みがあるものではない、と。ああ、この見解に関しては、私は剛直さを捨てて心から屈服する。洛漁王鐸琅華館で書す。

〔注〕

臨淳化閣帖跋 本文も「臨淳化閣帖簽注一」と同じ作品に記されている。

劉正成「王鐸書論選注」では、「己丑…」以降の文が省略されているが全文掲載して補った。

義獻 王羲之・王献之のこと。

發源 物事の起源。劉勰『文心雕龍』頌讚「發源雖遠、而致用蓋寡。」

米 北宋の書家米芾のこと。米芾（一〇五一～一一〇七）、初名は黻。元祐

六年（一一〇九）以降は芾とした。字は元章。礼部員外郎の官名から米南

宮とも称される。襄陽の人。蔡襄、蘇軾、黄庭堅と共に北宋の四大家と並

称される。著書に、『書史』『畫史』『硯史』『寶章待訪録』『寶晉英光集』

などがある。

参考文献

石田肇二〇〇七「米芾」前掲『日本・中国・朝鮮書道史年表事典』p.204

蔡 北宋の蔡襄のこと。蔡襄（一〇二二～一〇六七）、字は君謨。興化軍仙

游の人。蔡襄に関して、石田によれば、蔡襄は蘇軾、黄庭堅、米芾となら

んで北宋の四大家の一人にあげられるが、本来は蔡襄でなく蔡京がその一

人であり、蔡京の評判が悪いため、同族で書名の高い蔡襄が四大家の一人

になったとする説があるという。解釈にあたっては、「蔡」を蔡襄として

扱った。

参考文献

石田肇二〇〇七「蔡襄」前掲『日本・中国・朝鮮書道史年表事典』p.199

虞 虞世南のこと。

柳 柳公権のこと。

歐 唐の欧陽詢のこと。欧陽詢（五五七～六四二）、字は信本。潭州臨湘の

人。書は王羲之、王献之を学び、虞世南、褚遂良、薛稷とともに初唐の四

大家と呼ばれる。代表作「九成宮醴泉銘」は、楷法の極則と称される。

参考文献

下野健二二〇〇七「欧陽詢・九成宮醴泉銘」前掲『日本・中国・朝鮮書

道史年表事典』p.173

彊項 剛直な様。『後漢書』楊震傳「帝嘗從容問奇曰、朕何如桓帝、對曰、

陛下之於桓帝、亦猶虞舜比德唐堯。帝不悅曰、卿強項、真楊震子孫。」

萬籟 『大漢和辭典』によると、萬は矩に同じ、籟は篋に同じであり、篋

は篋に作るという。つまり、萬籟は矩篋であり、規則を意味する。『楚辭』

離騷「日勉升降以上下兮、求矩矱之所同。」とあり、王逸の注に「矩、法

也、矱、於縛切、度也。」とある。

博文 古代の文献に精通すること。漢 趙岐「孟子題辭」…「諸經通議、得

引孟子以明事、謂之博文。」

王鑑 王鐸の三弟。字は子陶。

研慮 物事について研究し考えること。劉勰『文心雕龍』神思「覃思之士、

情饒歧路、鑒在疑後、研慮方定。」

宋詞元曲

詞は唐代後期から宋代に渡り流行した韻文形式。詩余、填詞とも呼ばれる。

元曲は元代に流行した雜劇の総称。北方系の旋律とともに、一本四折構成。

權衡 權は錘、衡は竿のこと。つまり、物事の標準のこと。『禮記』深衣「規

矩取其無私、繩取其直、權衡取其平。」

寤言 向かい合って話すこと。漢劉向『列女傳』魯黔婁妻「君子謂黔婁妻

為樂貧行道。詩曰、彼美淑姬、可與寤言。」

鍾惺 鍾惺・譚元春のこと。鍾惺（二五七四～一六二五）、字は伯敬。万曆

三八年の進士。譚元春（一五八六～一六三七）、字は友夏。鍾惺・譚元春

ともに竟陵出身で、竟陵派の主導者。竟陵派について、古川は『古文辞』

に反撥して、自由な詩を主張したことは、公安と同じであるが、公安が専

ら平易を喜ぶに對し、この派は、奇妙な措辭と奇妙な着想をこのんだ。ま

た奇妙な閑寂さを喜び、『幽深孤峭』と称せられる」と説明する。

参考文献

古川幸次郎 二〇〇六『元明詩概説』岩波書店

酸薄 酸薄は儉約して質素であること。

淺隘 淺隘は狭く窄まること。晉葛洪『抱朴子』尚博「拘繫之徒、桎梏淺

隘之中、挈瓶訓詁之間。」

禪門十二部 禪門は禪宗のこと。十二部は十二部經のこと。『佛教語大辞典

上巻』「十二部經」の項目によれば、十二部經は「仏典の叙述の形式、ま

たは内容から十二に分類したもの。」であるという。

参考文献

中村元 一九七五『佛教語大辞典 上巻』東京書籍

中村元 一九七五『佛教語大辞典 下巻』東京書籍

大乘 『佛教語大辞典 下巻』「大乘」の項目によれば、「大きな乗り物の意。

仏教の二大流派の一つ。一、二世紀ごろ興起した。従来の仏教である、いわゆる小乗に対する。その特徴は、自利よりも広く衆生を救済するための利他行を実践し、それによって仏となることを主張する点にある。」と説明している。

小乗 『佛教語大辞典 上巻』「小乗」の項目によれば、「大乘に比べてその修する人が劣る点で、それを蔑称して小乗という。声聞乗ともいう。劣った乗り物の意。大乘のほうからつけた貶称である」と説明している。

正宗 仏教で、初祖から伝わる正統の宗派のこと。宋 陳師道 請興化禪師疏「紹雪門之正宗、入慧林之半座。」

魔道 仏教用語。悪魔の世界を指す。『楞嚴經』卷六「縱有多智禪定現前、如不斷疑、必落魔道。」

戸曉 誰もが知っている。『漢書』劉輔傳「假令輔不坐直言、所坐不著、天下不可戸曉。」

大司寇北海張老社盟 張忻のこと。張忻（一五九〇～一六五八）、号は北海。

山東掖県の人。天啓五年（一六二五）の進士。崇禎十六年（一六四三）に刑部尚書となる。大司寇は刑部尚書を指す。明清両朝に仕えた。『清史列傳』貳臣傳乙編に伝がある。明末清初には様々な文学結社が出現した。社盟はそうした文学結社の一員を指す。

嗣君中柱同館 嗣君は跡継ぎの子のこと。ここでは、張忻の息子である張端を示す。張端（一六一七～一六五四）、号は中柱。崇禎十六年の進士、庶吉士となる。明清両朝に仕えた。『清史列傳』貳臣傳乙編に伝がある。

迂叟 年老いた男性が自身を謙遜するという自称。白居易の詩「迂叟」に「初時被目為迂叟、近日蒙呼作隱人。」とある。

夫夫 男性のことを言う。ここでは、王鐸のことを指す。『禮記』檀弓上「曾子指子遊而示人曰、夫夫也、為習於禮者。」とあり、鄭玄の注に「夫夫、猶言此丈夫也。」とある。

源本 根本。『隋書』音樂誌上「樂者……實升平之冠帶、王化之源本。」

墨豬 線質が太く骨力のない書。舊題 晉 衛瓘『筆陣圖』「善筆力者多骨、

不羞筆力者多肉。多骨微肉者、謂之筋書、多肉微骨者、謂之墨豬。」

13. 再跋自書瓊蕊廬帖

辛巳初一日、披覽是冊、忽已四載。苦廬無佳況、墨事都廢、偶披輒覺稍快。然此予四十六歲筆、五十以後、更加淬礪、仍安於斯乎。譬之登山、所躋愈進、愈峻以曠。已經崇峯、頓俛於下。凡畫以自足、皆為河伯一流。兄鐸与二弟鏞。

再び自書の瓊蕊廬帖に跋す

辛巳初一日、是の冊を披覽す、忽ち已に四載なり。苦廬に佳況無く、墨事都て廢すも、偶々披けば輒ち稍や快たるを覺ゆ。然れども此れ予の四十六歳の筆なり、五十以後、更に淬礪を加えれば、仍ほ斯れに安んぜんや。之を登山に譬ふれば、躋（のぼ）る所愈々進めば、愈々峻にして以て曠（ひろ）し。已に崇峯を経れば、頓かに下に俛す。凡そ畫（か）ぎるに自足を以てすれば、皆な河伯一流為り。兄鐸二弟鏞に与ふ。

辛巳（崇禎十四年（一六四一））元日、この帖を広げて見るに、あつという間に四年も経過していた。父の喪中で興趣の湧く状況ではなく、書をまったく廃していたが、偶然この帖を広げて見れば少し気持ちが良くなった。しかし、この帖は私が四十六歳の時の作品である。五十歳以降、更に研鑽を積みめば、この成果に安住できようか。これを登山に喩えれば、登れば登るほど、山はますます険しくなるが視界が広がる。既に高山の山頂に達す

れば、急に下界を見る事になる。そもそも自分を限定して自己満足の世界になつてしまつたら、河伯と同様に自惚れた人になつてしまう。兄の王鐸が弟の王鏞に贈る。

〔注〕

再跋自書瓊蕊廬帖 王鐸は崇禎十年（一六三七）四十六歳の時に瓊蕊廬帖を書き上げ、その四年後の崇禎十四年（一六四一）五十歳の時に再び跋文を書いた。「然此予四十六歲筆：皆為河伯一流」の部分について、須羽は「弟の鏞を戒めた言葉を書いている」と説明し、「一般に書を学ぶものには勤めなければならぬ言葉であると思う」と見解を述べる。瓊蕊廬帖に関しては、臨古法帖後の注を参照。

参考文献

須羽源一「瓊蕊廬帖」前掲『書道藝術』

苦廬 古代、親の喪中の際に居る室のこと。南朝陳徐陵「在北齊與宗室書」…「固以形如槁木、心若死灰。匍匐苦廬、纔有魂氣。」

墨事都廢、偶披輒覺稍快然 薛龍春によれば、王鐸は、前年の九月二十二日に南京礼部尚書を受任したが、十一月二十八日に父の喪を聞いたため職を辞していたとする。そのため、この時に王鐸は喪に服していたということになり、父を亡くして間もない時期であったため、王鐸の心中は穏やかなものでなかったであろう。

参考文献

薛龍春 前掲『王鐸年譜長編』第二冊

淬礪 練磨すること。宋蘇軾「策略四」…「是以人人各盡其材。雖不肖者亦自淬厲、而不至於怠廢。」

曠 ひろい。広々としてゐること。
躋 のぼる。登ること。

已經 すでに経過すること。晉 幹寶『搜神記』卷十五「父母強逼、乃出聘劉祥、已經三年、日夕憶君、結恨致死、乖隔幽途。」

河伯 河の神。『莊子』秋水に「於是焉、河伯欣然自喜、以天下之美為盡在己。」（そこで河伯（河の神）はすっかり喜んで、天下の美観はことごとく自分にあるとかんがえ……）とあり、ここでは自惚れて自己満足してしまう人の喩え。現代語訳は、倉石武四郎・関止郎訳「莊子」（『中国古典文学大系 第四卷』平凡社 1973）より引用。

一流 同類 晉 葛洪『抱朴子』窮達「或問一流之才而或窮或達、其故何也」

二弟鏞 王鐸の弟王鏞のこと。字は仲和。

14. 跋瓊蕊廬帖

余手書、于詩、于文、于字、沉心驅*、割情*欲、*思跋彼室奧、恨古人不見我。故*食癯瘵以之。今再審觀、大覺育所証、珥不知於堂奧如何。歸之二弟仲蘇、則余三十年於書、於詩、於文、於字其敝精凝神、大可槩見矣。丁丑。初伏中識。王鐸。

瓊蕊廬帖に跋す

余は書に于いて、詩に于いて、文に于いて、字に于いて、心を沈め*を驅り、情を割き欲を*ち、*だ彼の室奥に跋（つまだ）たんと思ふも、古人の我に見（まみ）えざるを恨む。故に*食癯瘵も之を以てす。今再び審觀するに、大に証する所育るを覚ゆるも、珥（ひたす）ら堂奥の如何なる

を知らず。之を二弟仲蘇に歸すは、則ち余の三十年の書に於いて、詩に於いて、文に於いて、字に於いて其の精を敝り神を凝らせるは、大に槩見すべければなり。丁丑。初伏中に識す。王鐸。

私は書、詩、文、字において、心を静め知恵を駆使し欲情を断ち、ただその本質を望み見ようと思つてゐるが、古人と面会できないことを恨む。そのため、飲食する時も、夢を見ている時もこのことを心掛けてゐる。今再び仔細に考えるに、ただ悟つたところがあると感ずるだけで、相も変わらず、本質がどのようなものであるかを知らないのだ。この帖を二弟の王鏞に贈るのは、私の三十年間の書、詩、文、字において、その精神を疲弊させ集めさせてきたことはおおむねこの法帖に見られるからである。丁丑（崇禎十年）。初伏中に書く。王鐸。

〔注〕

跋瓊蕊廬帖 瓊蕊廬帖の跋文。劉正成は、先に王鐸が崇禎十四年に書いた「再跋自書瓊蕊廬帖」を載せ、次に崇禎十年に書いた本跋文を載せている。瓊蕊廬帖に関しては、1. 臨古法帖後の注を参照。

* *は智の異体字。『大漢和辞典』卷五・日部・一四一一三に「正字通」*、古文智字。「王鐸は「于」を旁に置く。

*欲 *は絶の異体字。『大漢和辞典』卷四・日部・九二二六に「説文」絶、*、古文絶。この箇所に関して、田中東竹、劉正成の二者は「斷欲」と読み、薛龍春は「絶欲」と読んでゐる。絶欲は一切の欲を断つこと。

* *は眞の「ハ」の部分が省略された直の異体字。『王鐸字典』の「直」の項目に収められてゐる。

跂 つまだつ。踵を上げて遠くを見ること。

室奥 室内のこと。室奥は室奥とも記される。ここでは、本質の喩えで使われている。漢・傅幹『王命敘』「世祖之徵符、其詳可聞也。其初育則靈光鑒於室奥、嘉禾滋於邑壤。」

*食 *は飢の「凡」の部分「欠」の字である飲の異体字。『王鐸字典』の「飲」の項目に収められている。

夢寐 夢は夢の異体字。夢寐。夢見ること。『後漢書』郎顗傳「此誠臣顗區區之念、夙夜夢寐、盡心所計。」

審觀 仔細に觀察すること。

次 亦の異体字。

育 有の異体字。

銓 あいかわらず。変化がなく、同じ様であること。『広韻』上平聲に「銓到也、又如一也。」とある。

堂奥 堂の奥深い所。学問や美術等の奥深い教えや境地の喩え。晉・裴頠「答石崇」に「窺瞻堂奥、欽蹈明規。」とある。

毆 音調を整える助字。石鼓文に「汧毆沔沔、丞彼淖淵。」とある。

二弟仲鯨 鯨は和の異体字。王鐸の弟王鏞のこと。

凝神 全ての精神を集中すること。『莊子』達生「孔子顧謂弟子曰、用誌不分、乃凝於神、其拘偃丈人之謂乎。」

槩見 槩は概の異体字。ざっと目を通すこと。明文徵明『晦庵詩話』敘「觀於文韜之書、可概見已。」

初伏 夏至から数えた三番目の庚日。また、夏至から数えた三番目の庚日から、次の庚日までの十日間のこと。『史記』秦本紀「二年、初伏、以狗禦蟲。」

15. 書峨眉山紀覽詩跋

己丑十月、瘧新瘥、頭眩暈、體猶作楚。過三弟大隱齋、一更濡墨書此。無善筆、炬下昧賁、亦覺不惡。三弟知書畫大意、不肯用力時習、然能知勝於不知者、遠若徑庭、不可混而不辨也。書學當年時恆易言之、迨五十彌喻其難。蓋書、古之跡易學、晉之神瞠乎其後、逾寫逾望洋。始覺少年氣浮心恣、不臻其室、故往往輕為發議焉耳。精要難窺、外藩易涉。登五嶽然後知山、浮海澳然後知海。詩、舉業、文、書皆然。嗚呼、素解人安得日夕遇之哉。王鐸書於大隱齋、時年五十有六。

峨眉山紀覽の詩を書すの跋

己丑十月、瘧新たに瘥（い）ゆるも、頭眩暈し、體は猶ほ楚を作す。三弟大隱齋を過り、一更に墨を濡らして此を書す。善き筆無く、炬下昧賁なるも、亦た惡しからざるを覺ゆ。三弟は書畫大意を知るも、力を用ゐて時に習ふを肯んぜず、然れども能知は不知に勝る者（こと）、遠きこと徑庭の若く、混ぜて辨ぜざるべからざるなり。書學少年の時に當たりては恆に之を言ひ易きも、五十に迫びて彌々其の難きを喻れり。蓋し書、古の跡學び易きも、晉の神は其の後に瞠乎たりて、逾々寫すれば逾々望洋たり。始めて少年の氣浮にして心恣たりて、其の室に臻らず、故に往往にして輕くも發議を爲すのみなるを覺ゆ。精要は窺ひ難く、外藩涉り易し。五嶽に登りて然る後に山を知り、海澳に浮かび然る後に海を知る。詩、舉業、文、書皆な然り。嗚呼、素解人安くんぞ日々之に遇ふを得んや。王鐸大隱齋に書し、時に年五十有六。

己丑（順治六年（一六四九））十月、熱病が治ったばかりで、まだ頭は眩暈がし、体は依然として苦痛を伴う。三弟王鑑の大隠齋に立ち寄り、一更の時に筆に墨を含ませ揮毫した。良い筆が無く、また蠟燭の灯りのもとでぼんやりとしてよく見えない状況であったが、これも悪くないと思った。王鑑は書画の大体の概要を知っているが、力を込めて常には学習しようとしな。しかし、よく知っていることは知らないことより優っており、両者は遥かに隔たっているのに、両者を混せて区別しないことはあつてはならない。書字に関しては、若い時はいつもそれについて述べることは簡単であったが、五十歳になってますます書字を語る難しさを理解した。そもそも書は、古代の書跡は字び易いが、晋代の書家の神品は後ろで目を見張るばかりで、臨書すればするほど、遥か遠くを仰ぎ見るようなものである。そこではじめて、若い時は気持ちいが浮つき心が粗雑で書の奥義に到達しておらず、それ故しばしば書字に対して軽率に意見を提示してしまうのであると感じた。書字の神髄を窺うのは難しいが、周辺を渡り歩くのは容易である。五嶽に登った後に山を知り、海港に舟を浮かべて後に海を知るのである。詩、科擧の試験勉強、文、画の全てがそうなのである。ああ、東晋の謝安のようにこの意義をよく理解できる人に日々出会えることなどあり得ないのだ。王鐸大隠齋にて書す。五十六歳。

〔注〕

書峨眉山紀覽跋 この作品の図版は『中國書法全集 第六十二卷 王鐸』に掲載される。また、『中國古代書畫圖目 九』（文物出版社、一九九二）にも図版が掲載されるが、款記の「王鐸書於大隱齋」が「王鐸書与大隱齋」

となっており、「時年五十有六」が書かれていない。この作品は、己丑（順治六年）十月に描かれた作品であり、王鐸五十八歳の書である。『中國書法全集』の方には、卷末に高士奇の跋文が付されている。また、峨眉山紀とは、薛龍春によれば、胡世安が編纂した『峨眉山紀』のことであるという。この跋文の前に詩が十首揮毫されているが、『擬山園選集』詩集・五律卷七（國家圖書館 古籍與特藏文獻資源）を参照すると、四首しか記載されていない。

瘡 おこり。熱病の一種。マラリア。

瘥 病気が治ること。癒えること。

眩暈 目眩のこと。『剪燈餘話』賈雲華還魂記「夫人亦眩暈思臥 乃先就榻 惟娉率諸婢收拾盥器皿、鎖閉門戶。」

楚 苦痛。

三弟 王鑑のこと。

一更 午後七時から午後九時のこと。

炬下眯瞢 炬は松明、灯火、蠟燭のこと。眯瞢はよく見えない様。

徑庭 二つのものの間の隔たりのこと。清 錢謙益「永豐程翁七十壽序」に「繇此觀之、太公之教其子、視萬石君豈不有徑庭哉」とある。

恆 恒の異体字。

瞠乎其後 遅れをとり、追いつけないまま後ろから眺めること。つまり、力量が遠く及ばないこと。『莊子』田子方「夫子棄逸絕塵；而（顏）回瞠若乎後矣。」

望洋 遠くを仰ぎ見ること。望洋とも記す。『晏子春秋』諫上六「杜局望辛待於朝。」

惘 あらいこと。大まかなこと。

室 奥義。

發議 意見を述べること。

焉耳 感嘆の語義の助字。

精要 神髓。南朝梁鍾嶸『詩品』卷中「嶸謂約所著既多、今剪除淫雜、收其精要、允為中品之第矣。」

外藩 諸侯の封ぜられた国のこと。『晉書』禮誌上「哀帝以外藩援立。」

五嶽 泰山、衡山、華山、恒山、嵩山の五岳のこと。『周禮』春官大宗伯「以血祭祭社稷、五祀、五嶽。」鄭玄の注に「五嶽、東曰岱宗、南曰衡山、西曰華山、北曰恒山、中曰嵩高山。」とある。

海澳 海の水が陸に湾入している所で船が止められる場所。

舉業 科擧受験のための試験勉強のこと。後蜀何光遠『鑑誠錄』攻難詠「陳裕秀才下第、遊蜀、誓棄舉業、唯事唇舌。」

素解人 意義を理解できる人。南朝・宋・劉義慶『世說新語』文學「謝安年少時、請阮光祿道『白馬論』。為論以示謝、於時謝不即解阮語、重相咨盡、阮乃嘆曰、非但能言人不可得、正素解人亦不可得。」

16. 臨士徽之書後

徽之書法、溫潤縣密、有遠水流煙之致。惜不多見、載之古今、寥寥數行耳。極力摹寫、瞠乎其後、始信書法非易事也。丙子臨於鍾山借叢齋中。王鐸。

王徽之書を臨すの後

徽之の書法は、溫潤縣密にして、遠水流煙の致有り。惜しむらくは多く

は見ず、之を古今に載するは、寥寥數行のみ。極力摹寫するも、其の後に瞠乎たりて、始めて書法の易事にあらざることを信ず。丙子鍾山借叢齋中に臨す。王鐸。

王徽之の書法は穩やかで潤いがあり、布置によく注意が払われ、遠くの川に霧が流れるような趣がある。残念なことに、王徽之の書は多く見られず、古今の法帖に残されているのは僅か數行だけである。力を尽くして臨書したが、遠く及ばず、後ろで目を見張るばかりである。そこではじめて書法は容易なことではないことを確信した。丙子（崇禎九年（一六三六））鍾山の借叢齋中で臨書する。王鐸。

〔注〕

臨士徽之書後 瓊憲廬帖記載の跋文。瓊憲廬帖に關しては、1. 臨古法帖後の注を参照。崇禎九年（一六三六）王鐸は、南京にあつて、南京郊外の鍾山に瞻泉軒という借家を借りて住んでいた。「借叢齋」という書齋名は借家の瞻泉軒に基づくものであらう。

王徽之 生卒年不明。東晉の書家で王羲之の実子。字は子猷。官は黃門侍郎となる。その書作品は『萬歲通天進帖』、『淳化閣帖』などに収められる。

参考文献

二玄社編集部編 前掲『書道辞典 増補版』

溫潤 穩やかで柔らかくみずみずしい様。『礼記』聘義「夫昔者君子比德於玉焉、溫潤而澤仁也。」

縣密 縣は綿の異体字。きめ細かく周到で綿密である様。『周書』藝術伝・姚僧坦「卿用意綿密、乃至於此。」

流煙 ゆらゆら流れ動く霧の様子。

寥寥 数が非常に少ないこと。唐 權德輿「舟行見月」に「月入孤舟夜半晴、寥寥霜雁兩二聲。」とある。

瞠乎其後 力量が遠く及ばないこと。

17. 贈湯若望詩冊跋

書時、二榼子戯於前、嘖嘖聲亂、遂落數々如龍形、萬壑等字、亦可噱也。書畫事、須深山中、松濤雲影中揮灑、乃為愉快、安可得乎。王鐸漫識。

湯若望に贈る詩冊の跋

書時、二榼子前に戯れ、嘖嘖聲亂し、遂に数数の龍形、萬壑等の如き字を落とすも、亦た噱ふべきなり。書畫の事、須らく深山中、松濤雲影中に揮灑すべくして、乃ち愉快爲るも、安くんぞ得べけんや。王鐸漫りに識す。

書写の際、二人の子供が私の前で遊んでおり、声を上げて泣き騒がしいので、とうとう龍形、萬壑などの数個の字を書き落としてしまったことは、お笑いぐさである。書畫の事は、深山の中、松風の音がし雲に覆われた中で揮毫すべきで、そうしてこそ愉快であるが、今の私には得られない。王鐸がとりとめもなく記す。

〔注〕

贈湯若望詩冊跋 湯若望（一五九二―一六六六）はジェズイット会のドイツ人宣教師アダム・シヤール（Johann Adam Schall von Bell）のこと。字は道元。明末に中国を訪れ、百三十七卷からなる『崇禎曆書』を完成させた。また清代では、欽天監監正に任ぜられた。この作品の図版は、『王鐸の書法【冊篇】』、『中國書法全集 第六一巻 王鐸』などに収録されている。

榼子 幼い子供。『史記』屈原賈生列傳「懷王稚子蘭勸王行、奈何絶秦歡。懷王卒行。」

嘖嘖 泣くこと。

遂落數々如龍形、萬壑等字 「過訪道末湯先生亭上登覽聞海外諸奇詩」

の其二を書く際、王鐸は「眉間藥色三元納、匣里龍□□壑寒。」と書き誤り、□の二字分（形、萬）の字を落としており、其一二の詩を書き終えた後で「形萬二字落」と付記している。また、「即吾園示僧」の詩でも、「秋深花□知溪晚、冬後鷓鴣鳴樹喧。」と書き誤り、□（落）部分の字を落としてしまい、詩の最後に「落々字」と記している。そのため、「落」の字を落としたことも含めて、「龍形、萬壑等」と跋で書いたのであろう。

「過訪道末湯先生亭上登覽聞海外諸奇詩」は、『擬山園選集』詩集・卷六・七言律詩（國家圖書館古籍與特藏文獻資源）では「過訪西洋湯子道登覽聞海外諸奇」と題が改められているが、其一二以降は記載されていない。「即吾園示僧」は、『擬山園選集』詩集・卷二・七言律詩「即吾園示無我」と題が改められている。

松濤 松風の音。元 趙孟頫『宿五華山懷德清別業』詩「二夜鬆濤枕上鳴、五華山館夢頻驚。」

18. 與董其昌論書

僕懶入骨、俗事如鬻火牛、無病呻吟。欲取鬻斛牀頭酒、與足下一談、恨無桃花機緣耳。昨曠騎持此帖來、刻手肅訛、肥于偏傍、裝束美艷、王嬾帶癢、亦自可憐。書法育大源流、河之崑崙、晉為一支、唐宋小陂塘而已。北齊顏氏訓、以巧勞智憂為累、是誠子雲掄齊書、王褒辛筆硯也。支江寺壁內懷可念、疲育用之精磋擊于此、即威波回踵之鸞、楷顧離陵之鵠、何補于誦讀。何補于事業哉。為觀此帖、經日忒忒、僕止悔罷不得、不然即六著二梵、猶足度日也。

董其昌に與へて書を論ず

僕懶にして入骨し、俗事萬の火牛の如く、病無きも呻吟す。萬斛牀頭の酒を取りて、足下と一談せんと欲するも、桃花の機縁無きを恨むのみ。昨曠騎此の帖を持ち來り、刻手訛有り、偏傍に肥ありて、裝束美艷なるも、王嬾癢を帶び、亦た自ら憐れむべし。書法に大源流有りて、河の崑崙なり。晉は一支と為し、唐宋は小陂塘ふのみ。北齊の顏氏訓、巧は勞し智は憂ふを以て累ひと為す。是れ子雲齊書を掄（おほ）ひ、王褒筆硯に辛（つら）しを誠（いまし）むるなり。支江寺壁は内懷を念ふべし。有用の精もて之を磋き撃つに疲る。即（たと）へ威波は墮の鸞を回らせ、楷は離陵の鵠を顧みせしむも、何ぞ誦讀を補はんや。何ぞ事業を補はんや。為に此の帖を觀（み）て、經日忒忒す。僕正に悔ゆるも罷むるを得ず。然らずんば即ち六著二梵、猶ほ日を度るに足るなり。

私は怠け癖が酷い上に、俗事が一万頭の火牛のように押し寄せ、病氣を患ってはいませんが苦しみ呻いています。寢床の近くにある万斛の酒を取

り、あなたと一度話し合いたいのですが、桃花を肴に酒を飲む機会が無いことを恨むばかりです。昨日、あなたの使者が、この法帖を私の元へ届けに來ましたが、刻工の技量に問題があり、字の偏傍が肥えており、身なりは美しく艶やかですが、王昭君が病を患ったようで、これも自ら愛おしむべきでしょう。書法には大きな源流が存在し、黄河の源が崑崙山であるようなものです。晋の書はその一つの支流であり、唐宋の書は小さな土手で覆われた小川に過ぎません。北齊・顏之推『顏氏家訓』では、「巧者は苦勞し、智者は憂う」ということで（書に秀でた者は）迷惑を被るとあります。これは蕭子雲が『齊書』で著した自身の文才が自身の優れた筆跡のために隠れたこと、王褒が書に優れていたために筆硯の職務に苦勞したことを戒めたものです。劉岳が絵に巧みであったために、支江の寺院の壁に絵を描かされたことでの心中の懊惱は哀れであり、有用な精力を畫の技量を磨き修めることに費やすことに疲れたのです。たとえ威波の書は落下する鸞を廻らせるように美しく、楷書は離陵に巢を作り住む鵠を振り返らせるように素晴らしくても、暗誦を助けるわけでもなく、功績を補うわけでもありません。そのため私はこの法帖を見て終日恐怖や不安を感じています。私はいま後悔していますが、やめる事はできません。そうでなければ、大博における六本の簪、小博における二つのサイコロのような賭博での時間潰しがなお日を送るのに値するものとなります。

〔注〕

與董其昌論書 『擬山園選集』文集（北京圖書館古籍珍本叢刊）卷五十に記載される尺牘「與玄宰」。

董其昌 董其昌（一五五五・一六三六）、字は玄宰。元々は上海の人であつ

たが、経済的問題から科挙合格以前に籍を松江府華亭県（現在の上海市）に移した。万曆十七年の進士。書画は、その理論も含めて後世に影響を及ぼした。著に『容台集』『画禪室隨筆』があり、家刻の法帖に『戲鴻堂帖』がある。

参考文献

澤田雅弘 二〇〇七『董其昌』前掲『日本・中国・朝鮮書道史年表事典』p.219

𪛗 萬の異体字。

𪛗 有の異体字。

𪛗 艷の異体字。

拵 掩の異体字。

入骨 極度に達すること。唐拾得「詩之十二」に「取債誇人我、論情人骨癡。」

火牛 牛の尾に火を付けて、敵陣に走らせる攻撃のこと。『史記』田單列傳

「田單乃收城中得千餘牛……束兵刃於其角、而灌脂束葦於尾、燒其端、鑿城數十穴、夜縱牛、壯士五千人隨其後、牛尾熟、怒而奔燕軍、燕軍夜大驚。」

呻吟 苦しき呻くこと。『呂氏春秋』大樂「君臣失位、父子失處、夫婦失宜、民人呻吟。」

斛 容量の単位。一斗の十倍。

牀頭 寝台付近のこと。

驩騎 唐代の宿衛兵。ここでは、董其昌が王鐸のもとへ送った使いを指す。

『新唐書』兵志「蓋唐有天下二百餘年、而兵之大勢三變、其始盛時有府兵、府兵後廢而為驩騎、驩騎又廢、而方鎮之兵盛矣。」

此帖 『戲鴻堂帖』のことか。『戲鴻堂帖』について、中田氏は、「戲鴻堂

帖は董其昌が晋、唐、宋、元の名蹟を集めて刻した法帖である。すべて十六卷ある。」とし、また「内容は董其昌の鑑識をへた法帖だけあってよく備わり、かれの自跋も加えられていて書字に益するところが少なくない。二王に関しても淳化閣帖などに見られぬ名品を多く収録している点が注目されるし、澄潭堂帖においても淳化にあるものなるべくさけて、たとえ淳化にあるものでも、唐模本によって知られている名品を選んでいるようにおもわれるなどさすがに董其昌らしい鑑識のすぐれた編集法をしている。ただ、摹勒と鐫刻がよくなかったので、清の王澐によって古今第一の悪札などと呼ばれている（古今法帖考）のは惜しい気がする。しかし、実際かれがみずから摹勒したのは汝南公主墓誌だけで、出師表は文彭がなし、そのほかは多く別人の手になったものといわれる。」と説明している。

参考文献

中田勇次郎 一九六〇『王羲之を中心とする法帖の研究』二玄社

王嬙 王昭君、名は嬙、字は昭君。前漢の元帝の宮女。和親政策のため匈奴の呼韓邪単于のもとへ嫁いだ。

癘 疫病。流行病の悪病のこと。

崑崙 崑崙山のこと。黄河の源ともされる。

陂塘 陂は坂のこと。塘は蔽うという意。『康熙字典』「塘 集韻 昌豔切 音癰 蔽也。」

北齊顔氏訓 北齊の顔之推が著した『顔氏家訓』のこと。主な現代語訳書

として、林田愼之助『顔氏家訓』（講談社、二〇一八）などがある。以下、『顔氏家訓』を引用するにあたり、現代語訳は林田氏が施したものを使用する。

以巧勢智憂為累 『顔氏家訓』雜爰篇に「夫巧者勢而智者憂、常為人所役

使、更覺爲累、韋仲將遺戒、深有以也。(そもそも、「巧者は(苦)勞し、智者は憂う」というとおり、あまり書の手手であれば、人に追い使われて、負担を感じるものである。三国時代の魏の韋誕(字は仲將)がのこした戒めは、意味が深く、もつともである。)」とある。

是誠子書接齊書 『顔氏家訓』雜篇に「蕭子雲每歎曰、吾著齊書、勒成一典、文章弘義、自謂可觀、唯以筆跡得名、亦異事也。(蕭子雲はいつもこういつていた。「わたしは『齊書』(『晋書』の間違いか)という史書を著わした。その文章も内容も相当の出来栄であるときてきたが、ただ筆跡が上手いということでは有名になった。なんとも異なことだ。)」とある。

王褒至筆硯也 『顔氏家訓』雜篇に「王褒地胄清華、才學優敏、後雖入關、亦被禮遇。猶以書工、崎嶇碑碣之間、辛苦筆硯之役、嘗悔恨曰、假使吾不知書、可不至今日邪。(王褒は、高貴な名門豪族の出身で、学識、才能に優れていた。南朝梁の江陵が滅んだ後に、関中に入って北周に仕えたが、そこでも礼遇された。けれども、書に巧みであつたばかりに、石碑の間に立ったり坐ったりして、筆硯の仕事に苦勞しなければならなかつた。それで、彼はこういつて後悔したものだ。『もしわたしが書道のことを知らなかつたならば、今日のような目に遭わないですんだであらうに』と。)」とある。

支江寺壁内懷可念 『顔氏家訓』雜篇に「彭城劉岳、臺之子也、仕爲驃騎府管記、平氏縣令、才學快士、而畫絕倫。後隨武陵王入蜀、下牢之敗、遂爲陸護軍畫支江寺壁、與諸士巧雜處。(また彭城の劉岳は、臺の息子であり、出仕して驃騎府管記となり、のちに知事職の平氏県令となつた。彼は才学のある快男子であり、しかも、彼の絵画は絶妙であつた。のちに武陵王に従つて蜀の国に入つたが、王の軍が下牢の地で戦さに敗北すると、彼

は北齊の護軍將軍陸法和に支江の寺院の壁に絵をかかされる破目となり、職人と一緒に壁画の仕事に従事した。)」とある。

即感波回墮之鸞、楷顧離陵之鵠 梁の庾肩吾『書』に「波回墮鏡之鸞、楷顧離陵之鵠」という一節がある。興膳宏譯「書品」梁・庾肩吾(『中国書論大系 第一卷』所収、二玄社、一九七八)がある。興膳氏は「波回墮鏡之鸞、楷顧離陵之鵠」を、「波の書(偃波篆?)は鏡に落ちる鸞を廻らせ、楷書は離陵に巣くう鵠をふりかえらせる」と訳している。興膳氏の注で、「波回墮鏡之鸞」について、「庾肩吾はこの話を単に美文のレトリックとして用いているのであつて、要は偃波篆の趣きが鸞の舞う姿を思わせるといつているにすぎない。」と説明している。また、「楷顧離陵之鵠」については、「波回墮鏡之鸞」と同じく、美文の機知的な技巧として用いられているだけで、さしたる深い意味はないと説明している。

誦説 暗記暗誦すること。

覲 みる。目の当たりにすること。

忤忤 心配で怯える様。『顔氏家訓』雜篇に「卜得惡卦、反令忤忤、此之謂乎。(占つた結果、悪い卦が出ると、かえつておしげづいた気持ちになつてしまったためである。)」とある。

六著二梵 『顔氏家訓』雜篇に「古爲大博則六箸、小博則二梵、今無曉者。(ところで、昔は大博には六本の箸(数さし)、小博には、二つの梵(投子)を使ったとあるが、今そのやり方を知っている者はいない。)」とある。
度日 困難な状況の日々を過ごすこと。『晋書』沮渠蒙遜載記「人無勸競之心、苟爲度日之事。」

19. 草書頌

草書之始、本篆所為、鳥跡穗為、施張育育。簡安飛揚、規動鬣隨。握固
 滾抵、寧極劃劃。左之勿疎、右焉勿卑。縮於内轂、馳驟鬱紆。間演隸波、
 元氣周回。迅發機赴、絕無閃掄。高望崎嶇、垂抱龍珠。擴於鸞折、睽目蛇
 瞿。似謫仍正、疑傾終夷。將犇姑雷、駐黼難尼。獅听猊怒、頓挫于諸。密
 闊有位、部厥掩師。縱橫顯伏、斷絕屹*。亂拂勾連、制勝扼腕。勿魔勿癡
 緣嶮臨危。尋測無端、妙寓此處。斂魄歸寂、包元一之。張芝義獻、餘剽邪
 枝。考古工滾、襲取蹈謬。骨脉凝神、妍皮罔臻。達旦天機、灑忘乎灑。庶
 無夸毘、勿勿奚暇。精味椒糈、勿日幻化。□□□□、空慙五悲。霧合星開
 地乳天眉。冥賞神台、略毛駟驪。大哉斯道、孕實母虛。怡此皓質、輒與松
 期。解者孰後、靈通經奇。浩唱舉槩、幽奧難知。

草書頌

草書の始めは、篆に本づき為す所なり。鳥跡穗為、施張に宜育り。簡安
 飛揚して、規動き鬣に隨ふ。滾抵を握固すれば、寧ぞ劃劃を極めん。之を
 左にするも疎（おろそ）かにする勿れ、焉を右にするも卑（いやし）くす
 る勿れ。内轂に縮め、馳驟するも鬱紆す。間に隸波を演（の）べ、元氣周
 回す。迅（はや）く發すれば機赴き、閃（ひらめ）き掄（ひ）くこと絶え
 て無し。高く崎嶇を望むがごとく、垂れては龍珠を抱（いだ）くがごとく
 然れ。鸞の折れるがごとく擴（ひろ）げ、睽（そむ）くに蛇瞿（おそ）るを
 以てせよ。謫（いつはり）に似るも仍ほ正しく、傾くるかと疑ふも終に夷
 （たい）らかなり。將に犇（はし）らんとして姑（しばらく）く雷（かみ）むるも、
 駐黼尼（とど）め難し。獅听し猊怒（いか）るも、諸（これ）に頓挫す。
 密闊の位有りて、厥（か）の師を拈（ち）らすを部（す）ぶるがごとし。

縦横に顯伏するも、斷絶し屹*せよ。亂（みだ）れ拂（もと）るも勾連す
 れば、制勝し欵（かたむ）きを扼（つか）む。魔すること勿れ癡すること
 勿れ、墟に緣りて危に臨むなり。尋測するも端無く、妙は此處に寓す。魄
 を斂（おさ）め歸寂し、元を包み之を一にせよ。張芝義獻、餘は邪枝を剽
 （けず）れ。古を考ふれば工（たくみ）にして深く、襲取し謬を蹈め。骨
 脈に神を凝らし、妍皮に臻（いた）る罔（な）かれ。達するに天機を目て
 し、灑（のつと）るも灑るを忘れよ。庶はくは夸毘すること無かれ、勿勿
 にして奚（なん）ぞ暇（いとま）あらんや。精しく椒糈を味（あぢ）はひ、
 幻化を日ふこと勿れ。□□□□、空しく五悲に慙（もた）ゆ。霧合さり星
 開き、地に乳ながれ天に眉ひらく。冥賞神合し、略ほ駟驪を毛（みわ）く。
 大なるかな斯の道や、實を孕み虚たること母（な）し。此の皓質の輒りに
 松と與に期すことを怡ぶ。解する者は後に熟し、經奇に靈通す。浩唱し槩
 を舉（あ）ぐるも、幽奥にして知り難し。

草書の起源は、篆書に基づいている。篆書の前身の鳥書・八種書は布置
 の展開に合理性がある。草書は簡潔で自由自在な書体であるので、規範は
 固定化せず多様に変化する。草書の本質を把握すれば、暗雲を掻き分け日
 月を見出すような必要はない。規範と食い違っても規範をおろそかにして
 はならず、規範を重視しても規範に対して卑屈になつてはいけない。

中心に向かつて力を集中し、勢いよく筆を進める時も慎重にする。時に
 隸書の波磔の筆意を展開させることで、字に活気がめぐる。筆遣いを速く
 すればインスピレーションが湧き出て、それがさつと撤退することは決し
 てない。高く険しい山を仰ぎ見るように目標を高く設定し、龍珠を抱くよ
 うに慎重に筆を進めよ。引き延ばす筆勢では鸞が反転するかのようにし、

返しの筆勢では蛇が恐れてとぐろを巻くようにせよ。

変わった字形のようではあるがやはり正しい字形であったり、字が傾いているのではと疑うが結局は大丈夫であつたりする。勢いよく筆を走らせようとして一時筆を止めるが、草書の筆勢を止めることは難しい。

獅子が大きな声をあげて怒るような爆発した感情に任せてしまうと、書の勢いが挫かれてしまう。

文字の疎密には一定の基準が存在し、軍隊の部隊の展開を統括するようなものである。筆意は奔放自在で顕在化することもあり伏在することもあるが、筆意が途絶えるところでは高山が屹立するように動揺することなく収束させよ。個々の字体が乱れ正しい字体から外れても、連綿させることで成功へと導き傾きを補正できる。魅入られてはならない、耽溺してはならない、それは廢墟に立てこもつて危機に直面するようなものである。探究しても特に根拠が見出せないが、草書の素晴らしさはその不揃いにある。心を集中させ悟りの境地に到達し、世界の根源を包み込みそれと一体化せよ。張芝、王羲之、王献之を基本とし、他の書家は不要な枝のごとく刈り取れ。古人の書法を研究すれば巧みさは奥深さを加え、張芝、王羲之、王献之を踏襲して基本を踏まえよ。

字の骨力に精神を集中し、その表面的な美しさを追求してはならない。天賦の才を發揮して目標をめざし、張芝、王羲之、王献之を規範とするが規範を忘れてしまえ。規範に媚び諂わないことを願うが、実は慌しくそのような暇などないのである。詳らかに山椒の実と精米を味わうように書の細部の隅々まで深く感じ取り、幻化という抽象的な見方で書を考えてはいけない。

□□□□、私は盧昭鄰と同じく五つの悲しみを思い煩っていた。しかし、

霧が収束し星が現れ、天地が喜びを示した。神秘的な境地に到達し、ほぼ優れた馬の毛並みを見分けるように書の良否が判別できるようになった。書の道はなんと偉大であることか。実体を生み出し続け尽きることがない。

白髪頭の私が万年の寿命を持つ松と契りを交わすことになったことを喜ぶ。書の本質を理解する者は年老いてから成熟し、不思議な力で常なる道と変則に通暁するのである。この頌（ほめうた）を作り歌い上げ、真理の概略を述べるが、書の道は隠微で奥深く理解し難いものである。

〔注〕

草書頌 『擬山園選集』文集・卷十六に収録。白謙慎によれば、この草書頌は一行脱落している可能性があるという。「草書頌」に関する先行研究を参照すると、白謙慎は「略毛駟驪、大哉斯道、孕實母處」と読み、「擬山園選集・文集」（河南人民出版社、二〇一三）では、「靈通經奇、浩唱舉概、幽奧難知。」と読み、劉正成は「考古工深、襲取蹈誤、骨脈凝神、妍皮罔臻、達以天機。」と読んでいる。ここでは押韻に従って「□□□□、空瀟五悲、霧合星開、地乳天眉。」とする。本作品は押韻によって全体が一〇の段落に分かれる。訳文は段落ごとに改行した。第一段落は上平四支（為、宜、隨、劉、卑）。第二段落は上平七虞（紆、揄、珠、瞿、回は上平十灰で例外。第三段落は上平四支（夷、尼）。第四段落は上平六魚（諸）。第五段落は上平四支（師、欽、危、虎、之、枝、謙、*は不明。第六段落は上平十一真（神、臻）。第七段落は去声二十二禡（暇、化）、入声「法」は例外で、入声の消滅した北方官話によるか。第八段落は上平四支（悲、眉、支。第九段落は上平六魚（處）。第十段落は上平四支

(期、奇、知)。

参考文献

Bai Qianshen (2003) *Fu Shan's World: The Transformation of Chinese Calligraphy in the Seventeenth Century*. (白謙慎 孫靜如・張佳傑 (譯) (2006) 『傅山的世界: 17世紀中國書法的嬗變(中譯增訂版)』新華書店)

爲 象の異体字。

育 有の異体字。

萬 萬の異体字。

滾 深の異体字。

回 回の旧字。

呂 以の異体字。

畱 留の旧字。

墟 墟の異体字。

脉 脈の異体字。

灋 法の異体字。

乎 乎の異体字。

管 首の異体字。

槩 概の異体字。

鳥跡穗爲 唐の韋續『墨藪』五十六書第一に「二炎帝神農氏因上黨羊頭山始生嘉禾八穗、作八穗書、用頒行時令。三黃帝史倉頡寫鳥跡爲文、作篆書。」の記述があり、鳥跡は鳥書のこと、穗象は八穗書のこと。つまり、王鐸は八穗書・鳥書の流れを経て篆書が発生し、後に草書が生まれたと捉えているのであろう。

施張 実施すること。『後漢書』濟南王劉康傳「大王以骨肉之親、享食茅土、

當施張政令、明其典法、出入進止、宜有期度、輿馬臺隸、應爲科品。」

簡安 簡単に安易なこと。

飛揚 勝手気ままであること。

『莊子』天地「趣舍滑心、使性飛揚。」

握固 しっかり握り固めること。『老子』「骨弱筋柔而握固。」

砥 砥は基本・基礎のこと。

劃割 割いて分けること。唐韓愈「潮州祭神文」に「劃割雲陰、卷月日也。」とある。

内轂 内側のこしき。轂は、車輪の輻が集まる中央部分のこと。道德真經注「輻、外也。轂、内也。内轂空、故外輻湊之。」

馳驟 馬に乗って駆けること。『韓非子』外儲說左下「造父禦四馬、馳驟周旋、而恣欲於馬。」

鬱紆 憂慮し、考えがぐるぐる巡る様。『文選』曹植・贈白馬王彪詩「鬱紆將何念、親愛在離居。」李周翰の注に「鬱紆、愁思繁也。」とある。

隸波 隸書における波磔のこと。ここでは章草のことを述べているのであろう。章草の特徴として、西林は「草書に捷書きするものの、一字一字が独立し、しかも終画に波磔の形勢をそなえた様式」と説明している。

参考文献

西林昭一 二〇〇七 「草書」 前掲『日本・中国・朝鮮書道史年表事典』 pp.102-103

元氣 万物を生み出す根本のこと。『後漢書』趙諮傳「夫亡者、元氣去體、貞魂遊散、反素復始、歸於無端。」

周回 巡ること。『魏書』藝術傳張淵「園苑周回以曲列、倉廩區別而殊形。」

崎嶇 険しい高山のこと。

龍珠 貴重な宝珠のこと。龍の顎下や龍の口から得られたと伝わったことから、その名がついた。南朝 梁 任昉『述異記』卷上「凡珠有龍珠 龍所吐者……越人諺云、種千畝木奴、不如一龍珠。」

睽 そむく。

虵 蛇のこと。

譎 普通とは違うこと。

犇 はしる。「奔」に通ずる。

黠 『康熙字典』黒部に「黠」廣韻 知庚切、音挂。有所絶止、而識之、謂之黠點。亦音主。衛常書勢 黠點、黠點。」「黠」集韻 乃玷切、音洽。黠、草書勢也。」

尼 とどめる。阻止する、阻むこと。

獅吼 怒 吼は大いに怒る声のこと。獅は獅子のこと。

密闊 闊は面積が大きいこと。故に、密闊は疎密の意。

厥 その。

拈 ちる。広がること。

屹* *の字は『大漢和辞典』『漢語大字典』に記載がない。偏の部分が山、旁の部分が里という漢字。劉正成は「屹立」と解釈している。

亂佛勾連 亂佛は乱れて怒ること。勾連は氣脈に通じること。

制勝 制庄して勝利すること。『孫子』虚實「人皆知我所以勝之形、而莫知吾所以制勝之形。」

扼歛 傾きがないようにしっかりと掴むこと。漢・揚雄『法言』重黎「或問、持滿、曰、扼歛。」

勿魔勿癖 魔は、一つのことに熱中して本性を見失うこと。癖は、くせ。墟 大きな丘のこと。

尋測 探り推量すること。

無端 起点がないこと。『管子』幼官「始乎無端、卒乎無窮、始乎無端、道也、卒乎無窮、徳也。」

苾虒 不揃いなこと。『史記』司馬相如列傳「柴池苾虒、旋環後宮。」

斂魄 斂は、おさめる。魄は、たましい。

歸寂 佛教語。死を意味する。金王若虚「太一三代度師蕭公墓表」に「速具湯沐、吾將歸寂。」とある。

包元 五徳を含むことを言う。『後漢書』梁統傳「伏維陛下、包元履徳、權時撥亂、功踰文武、徳侔高皇。」

張參義獻 張芝、王羲之、王献之のこと。

剗 かる。刈り取る。

襲取 急襲して奪い取ること。『漢書』周勃傳「攻都關、定陶、襲取宛胸、得單父令。」

謹 「基」に通ずる。

骨脉 骨格と動脈・静脈のこと。中心的な部分、及び一つの系統から分かれた部分の喩え。ここでは、字の骨力のことを指すと思われる。

凝神 全ての精神を集中すること。

妍皮 美しい外見のこと。

天機 生まれながらに備えている才能。顔之推『顔氏家訓』勉學「及至冠婚、體性稍定、因此天機、倍須訓誘。」

夸毘 媚び諂い従うこと。「毘」と「毗」は同字。『詩経』大雅板「天之方忭、無為夸毗。」

匆匆 慌しいこと。唐 牟融「送客之杭」詩「西風吹冷透貂裘、行色匆匆不暫留。」

椒糲 椒は山椒の実、糲は精米のこと。『楚辭』離騷「巫鹹將夕降兮、懷椒糲而要之。」

幻化 仏教語。全ての事物には実体がないことを意味する。晉 陶潛「歸園田居」詩之四「人生似幻化、終當歸空無。」

蕪 もだえる。

五悲 唐初の詩人盧照鄰の散文に「五悲文」がある。盧照鄰は、唐の鄧王に重用され、新都の尉を授かったが病のために辞職する。しかし、病は悪化し続け、具茨山（河南省）の麓に移住し、自身の墓を作った。「五悲文」は具茨山の麓で暮らしていた時に作られたものとされる。「五悲文」は、

「悲才難」「悲窮通」「悲昔遊」「悲今日」「悲人生」の五つから構成される。

「五悲文」の内容について、高木は『才の難きを悲しむ』は、才高くして世に恵まれぬ悲しみをのべ、『窮通悲しむ』は、年少時の聲譽にも拘らず、見るかげもなくうらぶれ果てた晩年の窮状を悲しむ。また『昔遊を悲しむ』には、若かりし日の官遊生活を追憶しつつ、憔悴した今のおのれに雨露の恩の及ばぬことを悲しみ歌い、『今日を悲しむ』には、現在の悲境をなげく。最後の『人生を悲しむ』には、佛家の所謂『二翻一覆は掌の如く、一生二死は輪の若き』人の世の定めを悟りえぬまま、儒・道二教にさまよってきた歎きをのべるが、これら五篇を貫くものは、悲運にうち沈む詩人の深い悲しみの情である。」と説明している。

参考文献

高木正二 一九六一「盧照鄰の伝記と文学」『立命館文学』一九六

霧合 霧や雲が立ち込むこと。『詩経』小雅白華「英英白雲、露彼蒼茅」

唐 孔穎達 疏「若露濃霧合、則清日為昏。」

地乳天眉 「地に乳ながれ天に眉ひらく。」と訓読して解釈した。草書の形態について言及しているのか。

神合 精神を一致すること。唐 元稹『鶯鶯傳』「心適身退、拜會無期、幽憤所鍾、千裏神合。千萬珍重。」

駟驪 駟は、黒いたてがみを持つ赤い馬。驪は、黒い馬。

孕實母虛 この部分に関して、劉正成、白謙慎は「孕實母虛」と読んでおり、『擬山園選集・文集』（河南人民出版社、二〇一三）では、「孕實母虛」と読んでいる。底本の『擬山園選集』文集・卷十六では「母」と記されている。

皓首 白髪。年老いたことをいう。唐 杜甫「醉為馬陵諸公攜酒相看」詩「向來皓首驚萬人、自倚紅顏能騎射。」

靈通 神靈に通ずること。

浩唱 大声で歌うこと。南朝 梁 沉約「郊居賦」に「悅臨風以浩、折瓊茅而延行。」とある。

幽奧 奥深いこと。『後漢書』馮衍傳下「覽天地之幽奧兮、統萬物之維綱。」